

徳島県立近代美術館企画交流室長
森 芳功 の



美術館の時間
はじめる

美術をたのしむ、美術館をたのしむ

その92 開館25周年記念の展覧会

フィギュア展

徳島県立近代美術館は、二月三日に開館二十五周年をむかえました。文化の森総合公園の開園二十五周年と重なっているため、今年の秋は、公園内でさまざまな展覧会や普及行事が行われました。連載その91(九月号)でも触れたように、近代美術館では「フィギュア展―ヒトガタ、人形、海洋堂(終了)」と「人間表現を築しむ25のとびら展」(二月二日まで)を開催。いずれも、当館のコレクションの柱の一つである「人間」の表現と関連つけた展覧会です。「フィギュア展」(担当…友井伸一、安達樹上席学芸員)は、第一部で、縄文時代以降の古い日本の「ヒトガタ」(ヒューマン・フィギュア)などを展示し、第二部では、現代のフィギュアとして海洋堂の全貌を紹介しました。海洋堂のフィギュアは多種多様で、アニメのキャラクター一つをとっても幅の広い年代の人が楽しめます。中年や初老の人も昔話に花が咲きますし、子どもはいま熱中しているキャラクターに釘付けです。リアリティなフィギュアらしい若者の姿も多く見かけました。保育所や小学校の子どもたち

ちを案内するときには、今までの展覧会と違って、解説などほとんど必要のない状態となります。子どもたちが語りだし、学芸員の私にも教えてくれるのです。アニメについては、子どもたちの方が知識は豊富なので、なかには、キャラクターの微妙な形の変遷について、詳細に解説してくれる子もいました。アニメのキャラクターだけでなく、昆虫や動物、海の生き物、あるいは恐竜や乗り物など、さまざまなフィギュアが展示されていますので、静かに見学している子もかぶりつき状態となります。印刷物や映画、テレビの画面に平面で表されたものが、立体となつて眼前に置かれていますので、特別なリアリティが感じられるのです。

「美術館でフィギュア？」と疑問に思つた大人の人も、第一部に展示された昔のフィギュアを見て、新たな発見があつたのではないのでしょうか。土偶や小さな仏像、人形、根付そしてお茶碗やザル、家具などのミニチュアセットまであつて多彩です。そっくりという点では、象牙に着色して本物と見分けがつかないトマトやバナナがあり、虫眼鏡で見なければならぬほど小さな細工がなされた、大仏のお身ぬぐいもありました。日本における「小さきものの愛」は、古く縄文時代からつながっているのです。その歴史にふれると、形を再現しようとする人々の情熱が感じられ、現代のフィギュアに対する見方も懐の広いものになつていくように思いました。

一九八〇年代と今日

もう一つの展覧会「人間表現を築しむ25のとびら展」(担当…筆者、竹内利夫上席学芸員、亀井幸子係長)では、多くの関連事業を行っています。会期がはじまつて最初に開かれたのが、現代美術作家・中西學さんによるワークショップ「人間像を造形作品にしてみよう」です。中西さんは、一九八〇年代の関西における「ニューウェーブ」の作家として登場した作家で、当館も彼の立体作品「ROCKIN' RIDER」(87、SIDE BY SIDE) (一九八七年)を所蔵しています。サンングラスをかけた真っ赤なジャケットの男が、バイクにまたがり、前輪を浮かせるウィリー走行をするようすを表した作品です。金色をちりばめた派手な色彩がほどこされ、形も変形し疾走感を演出しています。当時の日本社会が発散していたエネルギーな雰囲気を与える表現といえるでしょう。

中西さんのワークショップは、導入の話も興味深いものがありました。美術館がオープンした頃と現在までの時の流れを考えさせられたのです。

講座のはじめに、中西さんは一九八〇年代につくられたポスターを見せてくれました。東京のテレビ局TBSのもので、「走れば、まにあう。」という大きな文字が踊り、その横で派手な色彩の男が、テレビを抱えて勢いよく走っています。その人物は、中西さんがポスターのために制作した立体作品でした。画面全体がスピード感と活力に充ちていて、「走れば、まにあう。」というコピーも、時代の可能性のようなものを伝えていきます。関西の現代美術の元気のよさが、東京のメディアをとおして発信され、時代の空気と共振しあつていったのです。

実はこのワークショップの時期に合わせ、美術館ギャラリーで「25のとびら展」の関連展示「中西學 造形の世界」を開催しました。当館所蔵のライダーを中央に置き、まわりの壁面

に、彼の最新シリーズ「ルミナスフラックス（光束）」を展示し比較できるようにしたのです。新作は、宇宙を題材としたもので、ライダーのようなギラギラした都会の喧噪を感じさせる表現ではなく、内部にエネルギーを秘めつつも深い静寂を感じさせていました。

ライダーの作品や「走れば、まにあう。」のポスターが生み出された一九八〇年代から新作シリーズまでの期間は、当館の開館準備の頃から現在までの時代と重なります。中西さんから、時期を隔てた二つの作品について説明を聞きながら、当時と今を考えさせられました。

収集活動の蓄積

徳島県立近代美術館がオープンしたのは二五年前の一九九



中村大三郎〈二人舞妓〉 1926年



関連展示「中西學・造形の世界」

〇年。好景気だった八〇年代に建設が決まり、開館準備が進められました。その頃は、中西さんの八〇年代の作品に見られるような活力があった時期だと思えます。先のポスターにしても、テレビ局のもので、急げば放送時間に間に合うという意味なのでしょうが、頑張れば（現実とは別としても）何かが得られると思えた時代感覚を表しています。

当時、美術館の作品収集も、そのような活気ある空気の中かで進められていたのかもしれない。フランスの彫刻家、マイヨールの作品が最初のコレクションと

なったのが九八五年。それから数年間で、コレクションの核となる作品が集められています。いま開催中の「25のとびら展」には、ピカソの二点の油彩画など、その頃に収集された作品が何点も展示されています。ですがその後、一九九九年にバブルが崩壊し、長期の低成長期に入っていきます。

もちろん、収集活動はそれで終わったわけではありません。徳島県庁で美術館を含む文化の森総合公園の開館準備に携わった元県庁職員の方が、「25のとびら展」を見て、「私が知らない作品が随分あります。二五年前でコレクションも充実してきたので

すね」と話してくれました。「25のとびら展」は、人間像・人間表現の作品に注目しましたが、コレクションが充実してきたのは、他の収集の柱「徳島ゆかりの作家」「現代版画」でも同じです。とくに徳島ゆかりの作家の作品については、学芸員の長年の調査研究が認められ、作家やご遺族・コレクターから、少なくない名品の寄贈がありました。このことについては、徳島新聞の記事「文化の森25周年 上 県立近代美術館」（二〇二五年二月二三日）が、山下菊二の作品に

触れつつ紹介しています。

開館頃の収集は、二〇世紀の世界的巨匠というべき作家の作品がコレクションに加わり、マスコミも大きくとりあげてくれました。それに比べると、近年の収集は、おとなしく映るかもしれませんが、しかし地道な調査研究にもとづいて充実させてきたコレクションは、地域の文化にとって欠かせないものとなっています。そのことは、中西さんの近作のところで触れた、内にエネルギーを秘めた静けさと重ねてみたくまりました。

年間を通した紹介

継続することで蓄えられた力は、次の時代に向けた大きな可能性につながっていくはずです。「開館二五周年記念」と銘打った今年度の所蔵作品展は、年間を通してその成果を紹介する企画です。年度はじめの「新収蔵作品を中心に」に続き、五月から七月にかけて「徳島ゆかりの美術」と「現代版画」の特集を開催。「人間表現を楽しむ25のとびら展」とあわせて、当館の三つの収集方針（「人間」「徳島ゆかり」「現代版画」）の主な作品を、ご覧いただいています。そして、年明けの「同時代のアーテ

イストたちの表現へと続きます。いま開催中の「25のとびら展」は、一般財団法人地域創造の助成を得て、関連行事を含め、いつもの所蔵作品展よりもパワーアップした内容となっています。ぜひご覧ください。

12月の催し

■開館25周年記念「人間表現を楽しむ25のとびら展」1月11日（月）祝まで

・「びじゅつのとびら『音楽編』」5日（土）14時～16時30分 講師・高木夏奈子さん「植草学園大学」 対象…どなたでもメールか電話で申込

・「美術×音楽でひろがる鑑賞活動」6日（日）10時～12時、講師・高木夏奈子さん「植草学園大学」 対象…保幼小学校の教員、メールか電話で申込

・「びじゅつのとびら『ワクワク！アソビ！子ども編』」13日（日）10時～15時、講師…N.C.A.P（鳴門教育大学子ども向け美術ワークショップサークル）、対象…小学校3～6年生、二次締め切りは終わっていますが、定員に空きがある場合がありますので、お問い合わせください。

・「びじゅつのとびら『多文化編』」23日（水）祝 14時～16時、講師…Gertus三隅友子「徳島大学」 対象…どなたでも

※【要約筆記】耳が聞こえない方で、要約筆記（筆談などを文字で伝えます）を希望する方は2週間前までにお問い合わせください。